

## 新資料 堀口大學の書簡紹介

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 順子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1440">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1440</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 新資料 堀口大學の書簡紹介

東 順 子

お手紙拝受。お元気で何よりです。当方も亦瓦全。戸隠<sup>注1</sup>へ来てゐられる由その当時(?)風のたよりにききました。行つてみたいと思つたりもしたのですが、仕事に来てゐられるのだと、邪魔になると思つてやめにしました。小生等も今夏は例の妙高々原の関川<sup>(注2)</sup>で暮らし、去る五日に高田へ戻つたところです。十二月から二泊で関川<sup>(注3)</sup>の村の祭りを見に出向き、今朝また戻つて来たところでした。天神社の老杉の下で、おそくまで、仮装の若い男女が踊るすがたが、折りからのきりに包まれて、何とも美しいことでした。仮装といつても、大方は手古舞姿か、はでな友仙の長襦袢に花笠とかざられて、野放圖な惡趣味なものはなく、彼等の Bon goût<sup>注4</sup>には感心しました。いづれも若く、健康な人たち、乙女たちとて、それにこの辺の女たち男たち、いづれも顔だちがいいので、一寸白粉でもはいて、秋海棠の花びらほど口紅をさすと、いきなり目のさめるほどの美人になるのですね。『きりの中のをどり』<sup>注4</sup>は詩になりさうなものです。ね。一つやってみませんか。

次ぎ次ぎに下らぬ詩集<sup>注5</sup>を出して友人をなやますの罪は正に当死。だが友よ、安んぜよ。その後とんとインスピレーションに見放なされ、小詩集も出きつた形です。当分お目にかける集も成りさうにありません。今度は、友よ、大兄が、友なる大学の枯渴を嘆く順番かも知れない。桑原々々!

『数うた』<sup>注6</sup>への追加の二行、正に画龍点睛。重さ正に万きん。さすがは当代第一の才の人、君ならでやは誰れかよ



くせんと三嘆したことです。うやうやしく頂戴して、あの詩のテキストと定めます。そしてその由を書きそへて、君が情けを天下に誇示したいつもり也。小生は幼少の頃から大さう甘ったれやだったさうだが、今にこの氣持は残つてゐて、折りさへあれば何んにでもだれにでも、あまへかかる者也。

寛先生おん形見の印影注7同封いたしおきました。肉池の内容がなはだ粗惡になつてゐて、極めてこころもとない影しかうつらず、申わけないことです。そして残念なことです。

高田注8は雪の頃もよいが、秋の紅葉の頃もよいところです。昔の地割りがそのまゝに今に残つてゐる家中と呼ばれる区域の楓の垣根の紅葉の色づく頃のながめは、一寸天下の珍かも知れない。漱石がかつて一見して三嘆したといはれてゐます。(四十年ほど前にここの中学で一度講演注9をしたことがある由、但し何を語つたものか、誰れも知らないの注10で、松岡がやつきになつてゐる。)

二吾君注11はお元気で東京にゐられますか？ うちの坊子注12はこの頃あくたれいよいよ嵩じ、十年前の佐藤二吾君に大分似て來ました。頼しいと言つて慰めにしてゐます。『青春期の自画像注13』を小生にたまはる由一吾一代の光榮、面目注14ま何かこれに過ぎんや。So Kind of you! と平山英語で二三日前ならつたまゝを早速役立てます。

女の子注25の方が、(当三才)この頃大さう可愛くなりました。随分不器量の生れつきですが、親の目にはそれも大して苦にならず、色の白いは七難かくすとの俚諺注26にきいて、赤いべななぞきせて寵愛してゐます。男の子とはまた別のこれはよいもの。是非一人はとおすすめます。(今からでもおそくはないとはここに用ふべき言葉かと愚考。)こんなに書き立てて、君にけなりがらせるのも、何んとかして君にこの樂しみを思ひ知らせばやとてなりと御承知下さい。(妙な言葉を使ったが、これは單なる古志のなまりにはあらず、——さぞや欲しかろ、けなりかろ——との用例注16、大近松にあり。)

先日東京の某雜誌社から岩村田局指定の郵便為替が来て、受取りに難儀しました。その折、地圖をひらひてこの局注17

がおんあたりからほど遠くないところにあると知って、なつかしい思ひをしました。何しろあんまりここから遠くはない所に君がゐてくれると思ふと鬼の住む國の棲居も心強い。」君はいつまでも疎開<sup>注18</sup>ぐらしをつづける予定ですか。小生はいまだ歸京の<sup>注19</sup>あては全くなし。否、その<sup>注19</sup>あてなるものが月日と共にいや遠くなるやうな気がしてゐます。君はかへるべき家があるのだから、歸り度いといふ意志さへあればかへれる筈。遠く百里をへだてて暮すやうになる前に、四十里を越えて一度會<sup>注20</sup>つて、相見ておき度いもの哉なぞとまた甘つたれてゐます。

令夫人に特別なる小生のコンプリメントを捧げさせて下さい。祈安。勿々。頓首。再拜。

九月十四日午

大學生

春夫大兄 梧下

(封筒表)<sup>注21</sup>

長野県北作久郡

平根村

九月

(封筒裏) 上

十四日

佐藤春夫様

(封筒裏) 下 赤インクゴム印

高田市南城町三ノ八七

紳神社前<sup>注22</sup>(電話三三七)

堀口大學

前掲のものは、大妻女子大学図書館蔵の「佐藤春夫宛堀口大學書簡」(昭和二十二年九月十五日消印)の全文である。書簡は、半紙版四百字詰原稿用紙(ケイ色・黄土色)三枚、黒褐色インク・ペン書き、欄外右上に1〜3の通し番号がある。

この書簡は、一部分を佐藤春夫が詩「霧のなかのをどり」（「群像」昭和二十二年十二月号）の序として引用、全文を堀口大學の随想集『詩と詩人』（昭和二十三年十月三十日・大日本雄辯會講談社）に、九月二十九日付けのものと共に収録されている。

後に、佐藤春夫の短編「永く相おもふ——或は「ゆめみるひと」——」（初出「改造文芸」昭和二十四年一月）の中で、大学との間に一連の書簡があったことが示されており、それに拠れば、昭和二十年頃、「しばらく消息の無かつた興津の堀口大學から手紙があつた」という。前掲の書簡中にも触られている「寛先生おん形見の印影」の件である。昭和十年の与謝野寛の死後、「おん形見」として大學は「藤本鐵石画讃の軸」「爆弾三勇士の歌の草稿と短歌の手帳」と共に「寛先生お手作りの陶印」を受けている。一方、春夫は「先生の遺品として貴重な陶印二顆を恵まれた」はずだったが、届けられた小包には陶印一顆と「本格の篆刻」の石印一顆があつた。添えられた与謝野晶子の手紙には「ゆめみるひと」の方は鷗外先生のお作、「永く相想ふ」の方は主人が鷗外先生のひそみに倣ったものかいつぞや自ら手なぐさみに試み造つたもの」とあり、以来春夫は見ない「永く相おもふ」を気にかけていたらしい。昭和十七年十二月に刊行された『備齋雜記』の中に「与謝野寛先生遺品／鷗外先生自刻印／文曰「ゆめみるひと」の一文と印影を掲げた。再度、短編「永く相おもふ」によると、

堀口が「ゆめみるひと」の印影のあるあの本を今更おもひ出したのは、彼も時節柄、記念品の失はれるのを懼れてどこか安全地帯へ疎開を企ててその品物を見たにつけ思ひ出して書いた手紙なのではあるまいか。

と、書かれている。前掲の書簡は、この一連の手紙のうちの一通で、別紙の印影も再確認の為の同封と考えられる。但し、図書館蔵の書簡には添付されていない。

※

本稿では、以下、前掲の書簡を本文とし、注を付加する。

※

注1 佐藤春夫は、昭和二十年四月末から長野県北佐久郡平根村字横根に疎開していた。戸隠への旅行は、昭和二十二年八月。

注2 堀口大學の妻・マサノの生家が、新潟県の妙高山麓の関川にあり、高田に移る以前の疎開先であった。

注3 この「関川の村の祭りを……」から「一つやつてみませんか。」までは、春夫の詩「霧のなかのをどり」の序として引用されている。

注4 『霧のなかのをどり——堀口大學におくる——』の初出（「群像」昭和二十二年十二月号）は次の通り。

霧のなかのをどり 併に序

——堀口大學における——

序

詩友堀口大學のこのほどの手紙の一節に、「……関川の村の祭を見に出向き今朝戻つて来たところでした。天神社の老杉の下で、おそくまで假装の若い男女の踊るすがたが、折りからの霧に包まれて、何とも美しいことでした。假装とても、大かたは手古舞姿か、はでな友禪の長襦袢に花笠とかざられて、野放圖な無趣味なものなく、彼等の Bon-gout には感心しました。いづれも若く健康な人たち、少女たちとてそれにこの邊の女たちいづれも顔立ちがいいので一寸白粉でもはいて、秋海棠の花びらほどに紅をさすと、いきなり目のさめるほどの美人になるのですね。『きりの中のをどり』は詩になりさうなものです。一つやつてみませんか——とあつたのに興をそそられて、文中の言葉を多く借り用ゐる聊かは蛇足をそへて即興詩を試み大學詞兄の一祭を博しようと思ふ。

名香山村の関川は

おらが女房の里ちやとて

村の祭を見て来たが

意氣なものだて、しやれてたぜ。

ちよつと一はけ白粉おしろいはいて

秋海棠ほど口紅くちびるさして。

山の娘たあ見えなんだ、

闇屋の嫁には惜しいのさ。

手古舞すんなりと

手ぶり足ぶりしなやかに。

山の少女よ若い衆しんじゆうよ、

君が假装のほどのよさ。

はでな友禪長襦袢

花野の夢をひるがえし。



ものなつかしくうるはしく  
花笠みやびつつましく、

むかしゆかしいこのもしぎ、  
その Bon goût を讚美する。

野放圖なしは山の霧。

いよいよ深くなるばかり。

山の夜霧につつまれて、

天神さまの杉の下。

天狗なんかに見られつつ、  
妖精じみて子らは舞ふ。

狩場の鹿の人の世を

夢まぼろしと子らは舞ふ。

さもあらばあれ亡び行く  
國を思ふや忘るるや。

今はた何を思ふべき。

ほのぼのとして子らは舞ふ。

己が命のかげろふの

もゆるがままに子らは舞ふ。

消えてあとなき若き日の

霧のをどりをひとをどり。

村の祭を見てきたが

意気なものだて、しやれてたぜ。

この詩は、『まゆみ抄』（昭和二十三年十一月・信修堂）所収に際して序の最後が「即興詩を試み大學詞兄の一祭を博せしもの、地は隣國なれど甚近ければ今この集に収む。」となり、十一連「秋の夜霧につつまれて」、十二連「天狗や鬼女の見る前に」、十五連「今はた何を思へとか。」に改稿された。さらに、詩のあとに「この稿はじめ雑誌群像に寄す。当時発表のものとのこの稿と一二句相違あるは堀口君の加筆に従ふものなり。追記してその叱正を謝す。」と

ある。

また、大學の随想集『詩と詩人』（前出）には、同じ題の異稿が掲載されており、「きりの中のをどり」を示された大學が加筆したものと思われる。比較参考のため、全文引用する。

霧の中のをどり

名香山村の関川は

おらが女房が在所とて

秋の夜まつり見て来たが

意気なものだてしやれてたぜ

ちよいと一はけ白粉はいて

秋海棠ほどに口紅さして

山の娘たあ見えなんだ

闇屋の嫁にや惜しいがな

手古舞すがたすんなりと

手ぶり足ぶみしなやかに

山のおとめよ若い衆よ

君が假装のほどのよさ

はでな友禪、長襦袢

花笠みやびつつましく

むかしゆかしいこのもしざ

その *Bon gout* を讚美する

野放圖なしは山の霧

いよいよ深くなるばかり

祭り燈籠の紅い灯に

刷毛目をつけて流れよる

秋の夜きりにつつまれて

二重三重の輪になつて

天神さまの杉の下

天狗や鬼女の見る前で

イタコ甚句の聲わかやいで

妖精めいて子等は舞ふ

さもあらばあれ亡びゆく

國を想ふや忘るるや

今はた何を思へとや

心たのしく子等は舞ふ

若ら命のにははしき

霧のをどりをひとをどり

秋の夜まつり見て来たが

意氣なものだて、しやれてたぜ

注5 大學は、昭和二十二年一月から七月にかけて『冬心抄』（詩歌・書簡含む、斎藤書店）・『乳房』（ロゴス）・『人間の歌』（宝文堂）・『あまい囁き』（山谷書店）・『雪國にて』（柏書店）の各詩集を刊行していた。

注6 大學の詩「數うた」は、初出「明星」（昭和二十二年八月）。『夕の虹』（昭和三十三年七月・昭森社）には、春夫が追加した最終連を付加した形で所収。

數へうた

うそを數へて

ほんまどす

めくらを數へて

あんまどす

ととを數へて

さんまどす

とんぼを數へて

やんまどす

まぬけを數へて

とんまどす

くどうを敷へて

コンマどす

したを敷へて

エンマです

後注があり、「最後の一聯は、この詩が雑誌に出た時、佐藤春夫君が追加してくれた。おかげで大そう立派になった。有難く頂戴して彼の友情に甘えることによる。」となっている。

注7 この印影は、大學の手元にあった与謝野寛自作の陶印「永く相おもふ」のものらしい。これ以前の書簡で、与謝野晶子からの形見分けの次第を知らせており、鷗外作か寛作かの最終的な判断を任せたと考えられる。

注8 関川からの移転先。昭和二十一年十一月から、二十五年あたりまで在任。

注9 明治四十四年六月十九日、高田中学校の雨天体操場で講演、翌二十日には高田を発っている。二十・二十一日付の『高田日報』に「猫博士と中学生」という題で要旨が掲載された。（『増補改訂版漱石研究年表』昭和五十九年五月集英社に拠る）

注10 松岡譲。大学とは、長岡中学での同級生。

注11 春夫の長子、方哉。昭和七年十月生まれ。

注12 大學の長子、廣胖。昭和十八年二月生まれ。

注13 佐藤春夫『青春期の自画像』（昭和二十三年八月・共立書房）

注14 平川唯一。昭和十二年にNHK入社。昭和二十一年からラジオ英会話を担当。「平山」は誤記か。

注15 大學の次子、すみれの子。昭和二十年一月生まれ。

注 16 「この蚊張でしげらしやんしたらば、いかなる蚊<sup>ヌカ</sup>もけなりかる」の用例が『五十年忌歌念仏』にある。(『近松語彙』昭和五年五月・富山房による) 近松を離れば『菅原伝授手習鑑』に「御恩も送らず先達し嘸<sup>ヒ</sup>や草葉の陰よりも羨しかりうけなりかる」の例がある。

注 17 長野県北佐久郡岩村田。

注 18 春夫の疎開先、北佐久郡平根村。

注 19 前出の短編「永く相おもふ」によると、

終戦後、堀口は頻々と手紙をくれたがその一つによると東京のわたくしの家の向うの丘に在った長城先生(注・堀口九萬一、大學の実父)の邸宅も五月二十五日の戦災のために失はれて、大人も今は堀口のところに来て居る事を知つた。堀口は東京のわたくしの家の焼け失せたか否かを見舞つてくれたからそれが二十五日にも無事であつた事を答へると、この冬は佐久の山中で越冬する気が東京に帰るかと思つて来たのは秋も半頃であつたらうか。

と書かれているが、昭和二十年十月三十一日に九萬一が疎開先で死去していることから、この内容が前掲の書簡をさすとは断定できない。

注 20 この「一度会つて、相見」る計画が実現したのは、春夫の記憶に拠れば昭和二十三年七月(一九三八年)だが、大學は後の随想「二顆の陶印」のなかで「九萬一は一九五三年に死去、佐藤春夫ご夫妻来訪は一九五六年七月ではなかつたか」「春夫君の一九四八年は誤植か」としているが、年譜その他、回想録を見ても逝去は昭和二十年(一九四五年)である。昭和三十一年(一九五六年)一月には両家揃つての旅行もあり、同年五月には写真集『雪国』の出版記念会などで関川・高田を訪ね、又、十二月には、義父の葬儀のため出向している。この点は大學の記憶の混同があるのではないか。春夫の「永く相おもふ」が、「改造文芸」(昭和二十四年一月)に掲載されている事からも、昭和二十三年七月に会つたとするのが妥当か。この時に陶印「永く相おもふ」は大學から春夫へ譲渡された。

注 21 白無地二重封筒使用。宛名及び裏面日付は墨書。裏面下部の住所・氏名は赤のスタンプ。その下に墨にてメ印あり。

注 22 県社。祭神は神原康政命。

以上、年譜の参考は佐藤春夫については、講談社版『佐藤春夫全集12』(昭和四十五年三月)、堀口大學については、小沢書店版『堀口大學全集9』(昭和六十二年十二月)に拠つた。